
IS インフィニット・ストラトス ~完成したIS~

キューティクル雅彦

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

IS インフィニット・ストラトス ～完成したIS～

【Nコード】

N2348Y

【作者名】

キューティクル雅彦

【あらすじ】

普通で普通なオリ主に、篠ノ之東が普通じゃないISを渡した。それは、第零世代機と篠ノ之東は称して……？という感じのお話し。

たまに文が荒くなったり、ギャグとシリアスの落差が激しかったりするかもしれません。

プロローグ

佐藤勇氣は普通の人間だった。

特別な知り合いも居なければ、悲劇的な過去も、衝撃的な秘密も無い普通の人間。

成績も平均……よりちょっと下くらいだし、運動神経もそんなに良くない。

苗字も日本で一番多い苗字だし、名前も「誰よりも勇氣を出せる男の子になりますように」なんて、ありきたりな理由からつけられた名前だ。

ゆえに、だからこそ。そんな普通な人間だからこそ。

佐藤勇氣は、篠ノ之束に選ばれた……のかもしれない。

正式名称 インフィニット・ストラトス

元々は宇宙空間での活動を想定して作られたマルチフォーム・スーツ。

しかし宇宙進出は進まず、スペックを持てあました機械は“兵器”へと変わり、各国の思惑から健全な“スーツ”に落ち着いた飛行パワードスーツだ。

ただ、この現存する全ての兵器を凌駕する程のスペックを持ったI Sには決定的な“欠点”があった。

それは、男性には使えない事。

その欠点は一部の人間に『女性は偉い』という考えを生み出した。

そして、その考えはたった数年で『女尊男卑』という不完全な世界を作り上げていったのだった。

しかし、数か月前。この不完全な世界に一つの異常が現れた。

それが、人類初の『男性I S操縦者』の登場である。

「……………ううう」

男性初のIS操縦者、織斑一夏 おりむら いちか は、机にうつ伏せになってうめき声を上げていた。

ここはIS学園。

ISの操縦者を育てる為に作られたこの教育機関には、当たり前のように女子しか居ない訳で、その中に男子が放り込まれば必然的に注目が集まる訳で……。

今も、一夏は少なからずの視線を感じていた。

しかし、今一夏を苦しめているのは女子からの視線ではない。

“思わぬイレギュラー”により、思っていたより視線は少ないし、何より学園初日でも二時限目まで過ぎた今では、段々と視線にも慣れてきたのだ。

ならば、なぜ呻いているかといえば

(なんで、授業がこんなに難しいんだよ……)

IS学園での初授業。先に渡されていた資料を間違え捨てるというポカをしてしまった一夏は、早速授業についてこれなくなっていたのだ。

しかも一夏と“もう一人”以外、全員ちゃんと理解出来てるということで、授業中微妙な空気にしてしまい、それも一夏を追いつめていた。

「……………よしっ!」

しかし、いつまで気にしていても仕方ない。

教室の最前列に座っていた一夏は切り替えるようにして後ろを振り向く。

目に映るのは、やはり白を基調とした制服を着た女子生徒ばかり。

しかし、その中にある一つの異物。

それは、“思わぬイレギュラー”で、“もう一人の授業に追いつけなかった生徒”で。

もう一人の、“ISを動かせる男”

1週間前、織斑一夏の騒動も冷めやらぬ中、もう一つの話題が世間を騒がせた。

それは、ISの開発者でもある篠ノ之束が新たなISを操縦できる男を見つけたというニュース。

もちろん、そんな話題にマスコミが食いつかない筈が無く、その操縦者は一躍世界的に名が有名になった。

それがこの男子、佐藤勇氣 さとう ゆうき だ。

どうにもIS学園の制服が間に合わなかったらしく、周りとは正反對の色をした真っ黒な学ランを着ている。

白の中に黒。女子の中に男子と、どう考えても目立つ風貌をしていた佐藤勇氣は、周りの生徒の視線の大半を集めていた。

そのおかげで、一夏に集まる視線も少なくなっていたのだが。

しかし、視線を向けられている当人は気にした様子も無く、何か分厚い本を読んでいる。

(……………意外だな)

それを見た一夏の感想だった。

佐藤勇氣は、天然パーマに死んだような目と、対してチャラくも無ければ、真面目そうでもない　言ってしまうえば、見るものにマイナスなイメージしか与えそうにない外見をしているのだ。

だからこそ集中して本を読んでいる姿を、一夏は意外に思っていた。

しかし、数少ない男子。

どうせなら仲良くしたいと考え、そちらに足を踏み出したその時。

「ちょっと、よろしくって？」

見知らぬ女子生徒が一夏を引き止めた。

「ん……？」

いきなり話しかけられた為か、少し間の抜けた声で返す一夏。

見ると、欧州人なのか金髪碧眼に金髪を縦にロールした、ラノベにでも出てきそうないかにもお嬢様といった風貌の女子生徒がいた。

「まあ、なんですその返事！ 私に話しかけられるだけでも光栄なので、それ相応の態度というのがあるんじゃないですか？」

一夏……というより、男を見下すような視線を向ける女子生徒。

それは、今の世界の不完全さを象徴するような態度だった。

「……悪いな。俺、君が誰だか知らないし」

このような手合いが苦手な一夏は早々に話題を切り上げようとする。

しかし、その返答が気に入らなかったのか、その女子生徒は声を荒げながら一夏に詰め寄る。

「なっ……！ 私を知らない！？ セシリア・オルコットを！？ イギリスの代表候補生にして、入試主席のこの私を！？」

「あ、質問いいか？」

そんな女子生徒　セシリア・オルコットの態度をあまり気にせず、一夏は手を上げる。

「フフツ……。下々の者の要求に応えるのも貴族の務めですわ。よろしくてよ」

一応、質問の許可を貰った一夏は真面目な表情で、しかしながらセシリアからしたら信じられないような質問を口にする。

「　代表候補生ってなんだ？」

瞬間、聞き耳を立てていた生徒達がずっこけた。

「…………？」

「し…………信じられませんわ！ 日本の男性というのは皆これほど知識に乏しいものなのかしら…………。常識ですわよ、常識！」

呆れたように声を上げるセシリア。言葉の途中でもう一人の日本人男性の方にも目を向ける。

一夏も習って目を向ける。しかしそこにいる佐藤勇氣は、気にしてないのか気づいてないのか、相も変わらず本を読んでいる。

同じ男同士少しは助けてほしいと思った一夏だったが、仕方なしにセシリアに再度質問する。

「…………で、代表候補生って？」

先ほどの態度はどこへやら、今度はどこか誇らしげに答えるセシリア。

「国家代表IS操縦者、その候補生として選出される“エリート”の事ですわ。単語から想像したら分かるでしょうっ？」

そういえばそうだ、と頷く一夏。

セシリアはそこで止まらず、劇の様な身振り手振りで話しを続けていく。

「そう、エリートなのですわ！ 本来ならば私のような選ばれた人間とクラスを同じくするだけでも奇跡……幸運なのよ！ その現実をもう少し理解していただける？」

と、言われても一夏は今の今までその存在すら知らなかった身。

芸能人と同じクラスになった程度に受けとめれば良いのかと、適当に返事をする。

「そうか、そりゃラッキーだ」

「……馬鹿にしていますの？」

「お前が幸運だって言ったんじゃないか……」

「大体、何も知らないクセによくこの学園に入れましたわね。数少ないISを操縦できる男と聞いてましたが、期待外れですわ」

「俺に何か期待されても困るんだが……」

一夏自身、ISを動かせる事を知ったのが数ヶ月前。

それまでのISとの繋がりなんて精々、姉が世界大会で優勝してたり、幼なじみの姉がISの開発者だったりするくらいで……。

(あれ、結構繋がりが深くね……?)

いや、しかし。

繋がりが深いのは周りの人間であって、一夏自身はそこまでISに詳しくないのだ。

男で動かせるからって何でも知ってると思われては困る。

「フツ……。まあでも？ 私は優秀ですから、あなたの様な人間にも優しくしてあげても良くってよ？ 分からない事があれば……。まあ、泣いて頼まれたら教えて差し上げますわよ。なにせ私は、入試で唯一教官を倒したエリート中のエリートなのですから！」

話しの大半を聞き流していた一夏だったが、一つの言葉に引っかかりを覚える。

「……入試ってあれか？ 教官と戦うやつ」

「それ以外に入試などありませんわ」

「ああ、それなら俺も倒したぞ。教官」

「なっ………！」

いや、正確には“倒した”とは言わないだろう。

一夏の相手をした教官。相手が男という事でどこか慌てたのか、勝手に壁にぶつかって自滅したのだ。

ゆえに一夏は戦わずして勝った事になり、倒したと言われれば倒したのだろうが、別に一夏が強い訳では無い。

しかし、そんな事情を知らないセシリアは真に受けて一夏に質問する。

「き、教官を倒したのは私だけと聞きましたけど……?」

「女子ではってオチじゃないか?」

もしくは、一夏のはカウントされなかったかだが。

納得できないのか、セシリアは言い返そうとする。しかし、それは授業の始まりの鐘に遮られてしまった。

「……は、話しの続きはまた改めて！ よろしいですわね!?!」

それだけ言つと自分の席に戻って行くセシリア。その後ろ姿を見て一夏はため息を吐く。

そこで当初の予定を思い出し、佐藤勇気の方を見る。

佐藤勇気はチャイムが鳴つた事に気づかなかつたのか、なぜかニヤニヤしながら未だに本を読んでいる。

チャイムが鳴つた事を教えようとした一夏だったが、その前に担任

の教師が教室に入ってきたので大人しく席に座る事にした。

授業が始まり、教壇には先述した織斑一夏の姉であり、元世界最強である織斑千冬 おりむら ちふゆ が立っていた。

「それでは、この時間は実戦で使用する各種装備について説明する」
教科書を開きながら説明する千冬。しかし、途中で何かを思い出す様にして教科書を閉じた。

「と、その前にクラス代表を決めないといけないな」

クラス代表とは、再来週に行われるクラス対抗戦に出場する生徒の事だ。

それと同時にクラス長も兼任し、生徒会や委員会にも出席しなければならなくなる。

「ちなみに、一度決まったら一年間変更は無いからな。自薦他薦は問わない。誰かいないか？」

面倒そうだと判断した一夏は他人事の様に話しを聞いていた。

大体、普通の授業にすら追いつけていないのに、そんな事している
余裕は無い。

しかし、そんな一夏とは正反対の意見が周りから上がる。

「はいっ！ 私は一夏君が良いと思います」

「……お、俺!？」

一夏は思わず声を上げる。

しかしそんな一夏は無視され、どんどん賛成の意を示す生徒が増え
ていく。

そんな中、別の意見を示す生徒も出る。

「あ、じゃあ私は佐藤君で！」

「ふむ、織斑と佐藤だな。他に誰か立候補はいないか？」

じゃあ、ということは他の生徒達に対した考えは無いのだろう。

男だから、物珍しいから。そんな理由で変な責任を負いたくない
夏は、千冬に抗議しようとする。

「ち、ちよつと待ってくれ、俺は」

「納得いきませんわー!!」

一夏を遮る様に、別の人間の声が教室に響いた。

声を上げたのはイギリス代表候補生、セシリア・オルコット。

「そのような選出認められません！ 大体、男がクラス代表なんて
いい恥さらしですわ！ このセシリア・オルコットにそのような屈
辱を一年間味わえと仰るのですか!？」

この言葉にはムツとする一夏。しかし、セシリアはそんな事に気づ
かず話しを続ける。

「実力から考えれば私がクラス代表に選ばれるのは当然の話。……
それを物珍しいからといって極東の猿達を選ばれては困りますわ！
！ 私はISの技術を学びに来てるのであつてサーカスをする気は
ありませんから」

さらに顔をしかめる一夏。もう一人の男である佐藤勇氣はどう感じ
ているのかと伺い見るが、相変わらず本を読んでいるだけだった。

「 大体、文化としても後進的なこの国で暮らさなければいけな
い事自体、私にとっては耐え難い苦痛で 」

ここで耐えられなくなった一夏は立ち上がり、セシリアを遮るよう
にして声を放つ。

「イギリスだつて、大したお国自慢無いだろ。世界一マズい料理で
何年覇者だよ」

「なっ………！」

思わぬ一夏の反撃にセシリアは言葉を詰まらせる。

しかしそれは一瞬の事で、すぐに反論する。

「美味しい料理はたくさんありますわ！　あなた、私の祖国を馬鹿にしますの！？」

目を鋭くして睨むセシリア。しかし、一夏も負けじと睨み返す。

「　決闘ですわ！！」

「……良いぜ、四の五の言うより分かりやすい」

声高らかに宣言するセシリア。

一夏も頭に血が上っていたのか、『今時決闘？』とか『何で戦うの？』という当たり前の疑問も抱かずに即答する。

「言うておきますが、わざと負けたりしたら小間使い……いえ、奴隷にしますわよ」

時代錯誤というか、所々性癖が見え隠れしてそんなセシリアのセリフ。

それでも一夏は何の疑問も無く応える。

「侮るなよ。真剣勝負で手を抜くほど腐っちゃいない」

今度は挑発するように言い放つ。

「それで、ハンデはどれくらいが良い？」

「あら……早速お願いかしら？」

「いや、俺がハンデをどれくらいつけければ良いのかなーと……」

一夏の言葉を聞いたとたん、教室に笑いが巻き起こる。

それは別にプラスの意味ではなく、一夏を馬鹿にするような笑いだ。

「織斑君、それ本気で言ってるの？」

「男が女より強かったのって、昔の話だよ？」

「撤回するのも遅くないよ！」

その事に一夏はさらに不機嫌になる。だが、彼女達の言う事にも一理ある。

いや、別に男が女より弱いと思っている訳ではない。

ただ、セシリア・オルコットは代表候補生。それがどういふ事かはまだ詳しく知らないが、強い事は確か。

決闘というのは恐らくESでの勝負だろうし、初心者の自分がハンデを貰うのはお門違いだろう。

なら、ハンデは無しで良い。

一夏がそう言おうとした、その時。

「ククッ」

“男”の音が教室に響いた。

「ククツ……アハハハハ！！」

それはまるで、一夏を馬鹿にする生徒達。その者達を馬鹿にする笑い方。そう、聞こえた。

勿論、声の主は一夏ではない。だとすれば。

このクラスに。この学園に。残る男性は一人しか居ない。

佐藤勇気。

教室に居る者全員が、その人物に視線を向けていた。

「フフツ、アハハハハ！！」

「……な、何が可笑しいんですの……？」

そんな、一種不気味にも思える笑い方をする佐藤勇気に、セシリアは問いかける。

だが、一夏はここで自分が勘違いしていた事に気がついた。

学校の教室。分厚い本。その二つから、この前まで中学生だった夏は佐藤勇気が勉強していると思っていた。

しかしそれは違う。

何故なら、佐藤勇気が読んでいる物は

(……ああ、そうか……あいつが読んでいるのは……)

そして、佐藤勇気はセシリアの質問に答える。

「いや、今週のいぬまるくん面白いな〜って」

(週刊少年ジャンプだあ……)

教室にいた全員がずっこけた。

というか、何で授業中にジャンプ読んでるんだよ。

勿論、そんな不真面目な生徒を担当の織斑千冬が見逃す筈もなく。

鈍い音が響いた。

千冬が手に持っていた出席簿を勇気の頭に叩きつけた音だ。

「痛……っ！ な、何するんだよ……！」

「授業中に漫画を読むな。それと、教師には敬語を使え馬鹿者」

一撃目。

今度は出席簿ではなく、勇気から取り上げたジャンプを振り下ろす。

「お、おい……！ ジャンプをそんな乱暴な事に使……わないで下さいよ……！」

反論しようとするも、千冬の睨みによって尻すぼみになる勇氣。

その姿は誰から見ても情けなかった。

「ふ……ふん！ やはり男というのはその程度なのですね！！」

「黙れオルコット。貴様も授業中に勝手に演説をするな。立候補したいならそう言えば良いだろう。引っ込み思案か」

「な……！！」

調子を取り戻そうと声を上げるセシリア。しかし、それは千冬によつていとも簡単にへし折られた。

「さて……いい感じにオチもついたし、話しも纏まったな。勝負は一週間後の月曜、放課後に第三アリーナで行う。推薦された三人は用意しておくように。佐藤、お前もだぞ」

「……？」

話しを聞いていなかった勇氣は首を傾げる。

「勝負？ 推薦？ 何のこと？」

「千冬姉……じゃなかった、織斑先生、何で佐藤まで？」

言ってしまうえば、この決闘は一夏とセシリアの個人的な理由。佐藤
勇気まで巻き込む必要は無い筈だ。

「もののついでだ。……どうせなら一番強い者にクラス代表になっ
てもらった方が得策だろう？」

「……ああ、なるほど。」

「……？」

やはり話したついていけない勇気。

そんな勇気に千冬は、ああ、そうだ。と思い出したように告げる。

「ちなみに私はサンデー派だ」

「なん……だと……？」

プロローグ（後書き）

パクリと思われる部分がある時があるかもしれませんが、二次創作
なんで少しは勘弁して下さい。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2348y/>

IS インフィニット・ストラトス ~完成したIS~

2011年11月5日04時08分発行